



Vol. 38に寄せて

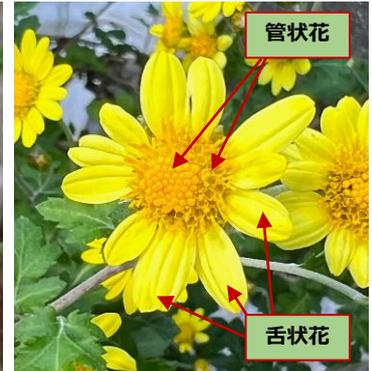


12月に入り、今年も1年が終わろうとしています。この冬は、時々暖かい日が訪れますが寒暖差が大きくなり体調の維持が難しく感じられますね。さて日本では、冬は「こたつでみかん」のイメージがあり、みかんは冬の定番の果物です。植物園でも数種のミカン類を栽培しており、見頃の植物欄に写真を並べてみました。そして、1号園の入り口花壇では、今年もクリスマスを演出した展示を行っています。毎年、飾り付けを変えていますので、是非ご覧いただけたらと思います。



11~12月に見頃を迎える植物：シマカンギク（キク科）

和名：シマカンギク  
 別名：アブラギク、ハマカンギク  
 学名：Chrysanthemum indicum Linné  
 薬用部：頭花  
 生薬名：キクカ、キッカ（菊花）  
 用途：解熱、抗炎症、目の充血  
 栽培場所：植物園 1号園  
 開花時期：11~12月



シマカンギクについて

日本の中南部、朝鮮半島、中国、インドなどに分布し、山地や丘陵地の道ばたなどに生える多年生草本である。草丈は30~80 cm、短く横走する地下茎を持ち、茎は直立する。葉は互生し、葉身は卵円形~長卵円形で長さは4~6 cm、羽状に5裂する。花期は11~12月で、茎の頂に、中心が深黄色の管状花とその周囲に淡黄色の舌状花からなる1.5~2.5 cmの頭花\*をつける。

<\*頭花については、植物園レターVol. 3をご覧ください>

菊花について

日本薬局方収載の生薬で、シマカンギクの他にキク (*C. morifolium*) も基原植物とされている。花の満開期に採集し、陰干しや蒸してから日干しなどで調製されるが、産地により加工法は異なる。シマカンギクは野生品、キクは栽培品が用いられている。日本では、シマカンギクとキクの両方を「菊花」として用いるが、中国ではシマカンギクを「野菊花」と呼び、菊花（キク由来）と区別して用いている。日本の市場では、シマカンギクに由来するものが扱われ、キクに由来するものを「杭菊花」という名称で区別することもある。一般漢方294処方中5処方に配合されており、解熱消炎、眼精疲労の改善を目的に配合される。



12月に見頃を迎えるその他の植物 <科名はAPG分類体系による>



ノイバラ（バラ科）  
 生薬名：エイジツ（営実）  
 薬用部：偽果または真果  
 効能：瀉下・利尿



ヒオウギ（アヤメ科）  
 生薬名：ヤカン（射干）  
 薬用部：根茎  
 効能：消炎、鎮痛（喉）



ワタ（アオイ科）  
 生薬名：メンジツ（シ）（綿実(子)）  
 薬用部：種子  
 効能：催乳薬、綿実油の原料



キンカン（ミカン科）  
 生薬名：キンキツ（金橘）  
 薬用部：果実  
 効能：解熱、咳止めなど



ユズ（ミカン科）  
 生薬名：トウシヒ（橙子皮）  
 薬用部：果皮（果実も使う）  
 効能：健胃



ウンシュウミカン（ミカン科）  
 生薬名：チンピ（陳皮）  
 薬用部：成熟果皮  
 効能：健胃、理気、去痰



ダイダイ（ミカン科）  
 生薬名：未熟果実：キジツ（枳実）  
 ；成熟果皮：トウヒ（橙皮）  
 効能：健胃、理気、去痰



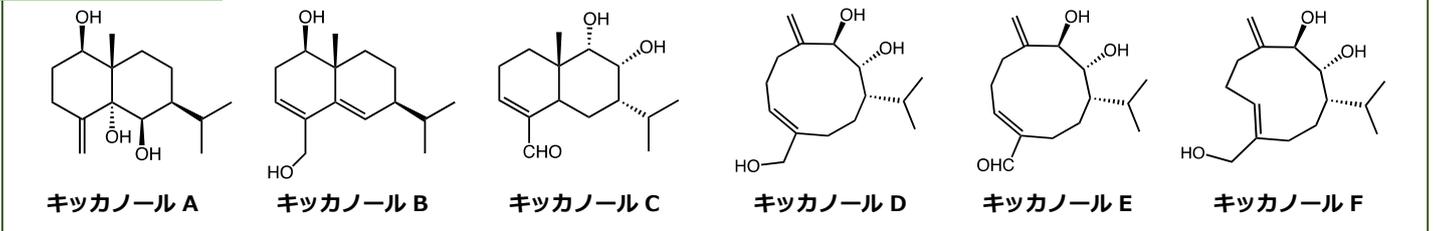
ナツミカン（ミカン科）  
 生薬名：キジツ（枳実）  
 薬用部：未熟果実  
 効能：健胃、理気、去痰

菊花（シマカンギク由来）の成分

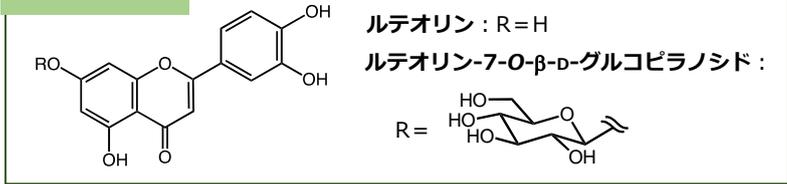
日本薬局方では、菊花としてシマカンギク、キクの2つが基原として認められているが、植物種によって報告される成分が異なっており、ここでは、シマカンギク由来の菊花の成分を紹介する。シマカンギク頭花のエキスから活性成分を検索した報告\*では、セスキテルペン化合物として、オイデスマン型のキッカノール A~C、10員環を持つゲルマクラン型のキッカノール D~Fなど数種類が報告されている。また、フラボノイドのルテオリンやその配糖体、ポリアセチレン化合物も報告されている。シマカンギク頭花のメタノールエキスおよびそこから得られた酢酸エチル画分には、アルドース還元酵素阻害やNO産生抑制作用が認められ、その活性成分としてルテオリンを報告している。ルテオリンは、キク（*C. morifolium*）由来の菊花にも含まれており、局方の確認試験（TLC）においては、ルテオリンが標準物質となっている。

\*Yoshikawa et al., Chem. Pharm. Bull., 47, 340(1999); 48, 651(2000).

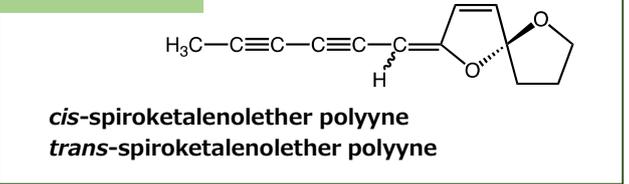
セスキテルペン



フラボノイド



ポリアセチレン



植物園で見られるキク類

キクという名称は、キク科植物の総称として使われることも多く、植物の「キク（*C. morifolium*）」は総称で使うキクと区別するために「イエギク」などと呼ばれる。ここでは広義の意味で、本園で栽培しているキク類の中から、秋～初冬が見頃の数種を紹介する。

**リュウノウギク** (*C. makinoi*) は、本州、四国、九州に分布し、枝には灰白色の密毛がある。茎の頂に中央が黄色で周辺の舌状花が白い頭花をつける。全草にカンフェンなどを主成分とする精油を含み、樟脳のような香りがする。全草は浴湯料として用いられる。

**イソギク** (*C. pacificum*) は、関東および東海地方以西の海岸の崖や斜面などに生える多年草。イソギクは黄色の管状花のみからなるが、時おり周囲に白色の舌状花が出るものがある。これはハナイソギク (*C. × marginatum*) と呼ばれ、イソギクとイエギクなどの自然交配種と考えられているが、先祖返りとの説もある。（本園でもハナイソギクが見られる）

**ハマギク** (*C. nipponicum*) は、茨城県以北の本州太平洋岸の崖地に生える多年草。根茎はなく、高さは50~100 cm。下部は太く低木状になり、翌年の春にその上端から新茎を出す。葉は枝頂に密生し、肉質で厚い。径約6 cmの頭花をつける。

**ツツブキ** (*Farfugium japonicum*) は、本州以南の日本各地、朝鮮半島などに分布し、海岸付近に生える多年草。園芸品が多く、庭にもよく植えられ、学内（ベンゼン池の周辺）でも多く見られる。根茎は生薬（藜蘆：タクゴ）として、健胃などを目的に使用される。



MEMO：名前について

シマカンギクの別名にはアブラギクやハマカンギクがある。この植物は、浜辺に生えるキクではないこと、昔からこのキクを油につけて傷薬としていたことから、植物学者の牧野富太郎博士は、アブラギクと改名することを勧めていたそうである。

キク（菊）の紋章

菊の花の紋章（菊花紋）は、私たちも時折目にする紋章です。菊花紋の中で、「十六弁八重表菊紋」は天皇陛下と皇室をあらわす紋章となっています。鎌倉時代、後鳥羽上皇が特に菊花を好み、持ち物に文様として取り入れ、その後代々使われていくうちに皇室の紋章として定着したと言われていました。花弁が16枚の十六菊花紋、十六弁八重表菊紋は、国章に準じたものとして扱われ、パスポートの表紙や日本国憲法の原本を収めた箱の蓋などに用いられています。また、花弁が16枚でない十四菊花紋や十二菊花紋は、国会議員のバッジや政党の党章などに利用されています。

菊は50円硬貨のデザインにも用いられており、薬用や観賞用だけでなく、古くから私たち日本人に馴染み深い植物といえます。



編集後記

今年も残りわずかとなりました。薬用植物園では、今年も屠蘇散を作ります。屠蘇散は、中国の名医「華佗」が考案した処方といわれ、邪気を屠り（ほぶり）、心身を蘇らせる効果があるとされ、お正月に無病息災を願って服用します。処方の構成には諸説ありますが、陳皮、桂皮、山椒、桔梗などが用いられます。学内で屠蘇散をご希望の方は、下記アドレスにお問い合わせください。

神戸薬科大学 薬用植物園  
 園長 小山 豊（薬理学研究室 教授）  
 西山由美（文責）、平野亜津沙、大井隆博  
 E-mail：[nisiyama@kobepharmaceutical.ac.jp](mailto:nisiyama@kobepharmaceutical.ac.jp)  
 協力 竹仲由希子（総合教育研究センター）

